

古代の匠に挑む

下の空古墳復元作業を追う

いくつかの候補の中から、六道町下の空古墳の石棺式石室を復元することになりました。下の空古墳にはすでに石室をおおっている盛り土はなく、石室もバラバラに解体されていましたが、これが逆に、復元するためのいろいろな情報を得るうえで好都合でした。

復元する大きさは実物の三分の二。石工さんたちはまず、造り方を検討するところから取りかかりました。「工具は何を使ったのか?」石工さんたちの厳しい目が、古代の匠の技に迫っていきます。

石を切り出す

石室に使用した石材は、どのようなものを使っていたのでしょうか。古墳時代にはまだキリヌキ(矢穴)技法は開発されていなかったから、石材は「玉石」と呼ばれる石の塊を使用したものと考えられます。

また石室に使われている板石は、露頭からはがれ落ちた板石の来待石を使ったと考えられます。今回の作業でも、玉石二個を割って用いることにしました。



下の空古墳の現状



奥壁・側壁を造る



天井石を造る



閉塞石のレリーフを刻む



出来上がり(実物の2/3)

側壁・奥壁・玄門部・床石を造る

側壁・奥壁は玉石を、玄門部(閉塞石をはめる外ワクの部分)は残りの玉石を使用しました。床石は一枚の大きな板ですが、玉石を利用したか、石山などで見られる板石状の石材を利用したかのどちらかだと思われれます。どの部分も石材の余分な所をケンノウと矢を使って落し、マサカリやツルハシで粗削りします。そして組み合わせ部分と接合面をチョウノウで仕上げます。

天井石を造る

天井部分の内面は、マサカリ・ツルハシで粗削りし、チョウノウを使って仕上げ、接合面はツルハシ・チョウノウで平らにします。外面は、屋根形に削り出します。

ナゾのレリーフを刻む

石室の閉塞石(墓穴のフタをする石)にレリーフを刻むのは、技術を要する細かい作業です。チョウノウとノミ、コツチを使い、慎重に削っていきます。このレリーフは二枚の扉

に「かんぬき」がかかった形をモチーフにしており、これは遠く肥後(現在の熊本県)から伝わったと考えられています。このレリーフのある閉塞石は、六道町の伊賀見1号墳や松江市の北小原1号横穴墓など、来待石で造られた古墳に多く見られます。

石を組む

各部分ができ上がり、いよいよ組立作業です。各部分を組み立てる順番については検討が重ねられ、奥壁・床石・玄門部・側壁・天井の順で行われることになりました。組み立て作業の最後に当たる閉塞石は一九九三年三月二十七日に開かれるシンポジウム「石とひと」の場で、はめこまれることになりました。

一九九三年三月二十七日、来待ストーン予定地で、石室の閉塞石がはめ込まれました。この瞬間、延べ三カ月にもおよんだ復元作業は終りを告げたのです。

くわしい復元作業の様子については、六道町ふるさと文庫「石とひと」にまとめられています。

石見の福光石

温泉の町として有名な、瀬戸内海沿岸の福光石は、良質な凝灰岩である「福光石」を産出し、たくさん石工により栄えました。この福光を支えた石工集団が、坪内平七を頂点とする一門です。

坪内平七一門の作品としてよく知られているのは、大田市大森町の石見銀山にある五百羅漢像でしょう。二つの石屋の中に座像五〇体が安置されていますが、それぞれの石像の表情一つひとつが実に豊かに造られていて、見る人に何かを語りかけてくるようです。

そのほか福光石を使ったものとしては、五輪塔や宝篋印塔などの墓塔や供養塔が数多く造られました。歴代の銀山奉行の墓塔も、福光石で造られています。福光石は現在も切り出され、建築材に用いられています。



福光本山石山東丁場



宝篋印塔(大田市大森町)



五百羅漢像



龍昌寺跡の宝篋印塔

来待ストーン

モニュメントミュージアム

来待石採石場跡地を利用して作った公園です。博物館や工房・採石場跡などあり、見て触れて、体験できる公園です。展示室には来待石の歴史、技術など「石と人の関わり」がわかるように実物資料や写真が展示してあります。

入館料 大人300円 小・中学生150円(月曜休館)
工房体験料 大人1500円 小・中学生1000円(要予約)



あなたの町にもある? 石切場

この巻に紹介した以外にも県内ではいろいろな石が切り出され、私たちの生活に役立っています。

あなたの町にも石切場がないか探してみてください。



荒島の石切場(最近切り出した跡)

(安来市荒島町)



安部谷の石の露頭

(古代に切り出した跡か?)(松江市大草町)